

『二本足』序

『二本足』ⁱは一篇の童話である。文学的童話はデンマークのアンデルセン（Hans Christian Andersen）に至ってすでに絶頂に達し、もう彼に及ぶことのできる者はいない。彼は永遠の子どもであり、詩人の筆でもって児童の思想を書いたから、その作品は文芸の創作であり、しかもまたほんとうの童話である。エワルド（Carl Ewald）ⁱⁱは彼の同郷であるけれども、かのご老体と座を争おうとしても、当然あまり希望はない。天下のどこに第二の七十歳の子どもがいるだろう。だが『二本足』は一篇の優れた文学の童話たるに恥じない。それ自身の特色を持っているからである。

自然の童話の妙は何か意味がなくとも構わないところにあるが、文学の童話はたいていの場合意味が趣味より多い。アンデルセンにしても多くがそうであって、ワイルド（Oscar Wilde）などを持ち出すまでもない。いわゆる意味とは二種に分けられる。一つは智慧であり、一つは知識である。第一種は教訓に重きを置き、主観的であり、勸戒の寄託から人生観の表現に至るまでがなかに入。種類もすこぶる多く、数量も少なくない。古来文学の童話はほとんど十中九までがこれに属する。第二種はすなわち科学の物語で、客観的である。科学の発達はもともと近百年来のことにすぎない。それら無味乾燥な事実を目新しく美味しい物語に語りなすのは決して生易しい仕事ではない。だからそうしたものは非常に少なく、ほとんど科目はあっても書物がなく、上のものとはまさに正反対である。『二本足』はこの科学の童話の中の佳作であって、うまく語られたばかりか、材料もとても戯曲の趣味と教育的価値が豊かである。

『二本足』は人類の生活の変遷を語る童話である。文化人類学の知識の教育上における価値はいくら見積もっても多すぎることはない。もし誰かが児童の心得るべき基本常識は何かと問うならば、生理以外にはわたしはこれを挙げる。中国人の小学教育は、両極端が忠孝節義を語ること、あるいは借用書・始末書はどう書くかを教えることであり、言うまでもなく、中間が彼らに人生の知識を与えることということになる。しかし天文地理を何年もやって、結果自分どのように生きているのかという事実さえ相変わらず分からない。こうしたやり方、教育者が彼らの瓢箪から売り出すのがどんな菓かは、我々素人には知りようがない。だがもし生徒の父兄の資格で一言いうことが許されるならば、わたしは子どもらが高等小学校で勉強するとき、国文・数学など以外に、人体及び人類の歴史に関するそれなりの常識を身につけなければならないと願う。だが現在の学校はたいていが職業と教訓を中心とし、あまりこうした小事を顧みる暇がない。動植物学の知識は多くが中立を守り、人間の生理とあまりつながらず、人体生理の教科書もまた一章を欠いている。中学になっても人間はまだ泌尿をしない。人類文化史に至っては講話の類のものでさえ課程にない。だからこうした知識は学校外の読み物に求めるしかない。わたしにはいま二人の娘がいるが、十二年来わたしはいつも、性教育の話の書を一冊用意して彼女らに読ませたいと焦ってき、いまは“尻に火がついて”いるのだが、ついに一冊として良い書物が見つからないし、また教師や医者がこの啓蒙の責任を代わりに担ってくれるところがどこにもない（わたしは自分でも実際あまり父たるの模範である資格がないと思っている）のは、まことに辛

いことである。文化の変遷を語る書物はまだ一二あり、たとえばすでに訳された『人間と自然』などは有益な本であるが、それは記録の文章であって、高等小学校の生徒には適するが、もっと幼い方には物語の方がふさわしい。『二本足』はそうした科学の童話の一つだと言える。

『二本足』はほんとうの意味での動物物語である。ふつうの動物物語はたいていが獣を人格化しているが、彼らの固有の特性を保存しているので、読めば人類社会の喜劇に似ており、もっぱら生物界の生活現象を表すことに重きを置いていない。『二本足』が動物物語と言われるのには別の意味がある。すなわちそれは主人公の二本足先生を一匹の動物として書いており、けっして彼を我々自身あるいは我々の祖先として、無意識であれ意識的であれ自己中心の粉飾を加えていないからである。それは二本足を十分利己的で強毅聡明な一人の人間として書いており、心の持ち方は従兄の猩々以下であるが、智力は様々なものを超えていると言う。良かれ悪しかれこれが要するに人類の実際の状況である。『二本足』は人類の生活を書き、人間を百獣の一つとして見ることができた。これは科学の精神に符合するばかりか、この物語をさらに面白くしている。

この科学の童話『二本足』はいま李小峰君によって中国語に訳された。子どもたちは感謝すべきである。拠ったのはマットス (A. Teixeira de Mattos) ⁱⁱⁱの英訳本で、もとに挿絵数幅があり、また雨の情景の一枚はデンマークの画家の原本で、特に面白く、読者の興味を引く助けになるだろうと思ったので、李君に頼んで全部入れてもらった。

民国十四年二月九日、北京にて記す。

※初出：1925年3月『語絲』第17期

ⁱ 『両條腿』 李小峯訳 北京北新書局 1925年5月初版

ⁱⁱ Carl Ewald(1856-1908) デンマークのジャーナリスト、童話作家。進化論をもとに自然史をおとぎ話に仕立てた『Tales』(1882-1906) 14巻がある。『二本足』もその中の一つであろう。

ⁱⁱⁱ マットス A. Teixeira de Mattos(1865-1921) アレクサンドル・テイシエラ・ド・マットス。オランダのジャーナリスト、翻訳家として有名。エワルドの作品を『Two-Legs』(1906)をはじめ相当数訳している。1906年のScribner版の初版には挿絵がなく、1921年版にはJohan BriedeとHelen Jacobsの挿絵がついている。周作人が雨の情景というのは多分Briedeの次の絵であろう。『雨の日の書』に因むものかもしれない。

